

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：34312

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13158

研究課題名（和文）主題化の研究：生成文法と国語学の接点

研究課題名（英文）A Study on Topicalization: toward the Interface between Generative Grammar and Traditional Japanese Linguistics

研究代表者

田口 茂樹 (TAGUCHI, Shigeki)

京都ノートルダム女子大学・国際言語文化学部・教授

研究者番号：00528664

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：主文におけるはだしの主題と、埋込文の対格主語との統語的・意味的な類似点だけでなく、両者が持つ談話効果の共通点が明らかになった。まず、対格主語に付与された「を」は、格助詞という単なる文法機能だけでなく、話者の先入観等に裏打ちされた旧情報に対する「意外性」という情動を表す談話標示詞であるという結論に至った。これを踏まえ、「なにを」を用いた理由疑問文において格助詞が脱落した場合に、元の談話効果が弱まる、或いは中立化する現象に着目した。結論として、主格の「が」と対格の「を」は非常に良く似た談話効果を持っており、両者の違いは、情動が旧情報に基づくものか新情報に基づくものかに集約されると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実用性よりも規範性を重視する国文法は世間一般で敬遠されがちであるが、本研究を通して、国語学者による着眼と知見の妥当性が立証できた。一見無関係に見える複数の文法現象が、根底に存在する一般的な性質から導き出されることを明らかにした点は、国語学と理論言語学との接点に対する実証的な具現化だと言える。例として、副助詞と格助詞という分類を踏襲しつつも、それらが持つ特性を談話効果や情報構造の観点から見直すことができた。伝統的に高く評価されてきた先行研究を、理論言語学の立場から再検証することの学術的意義はもとより、本研究によって学校における国語教育を再評価する契機となれば、社会的にも意義深いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：One of the remarkable contributions of this research is that it has shown commonalities in discourse effects between the matrix bare topic and the embedded accusative subject in Japanese, as well as the similarities in their syntactic/semantic behavior. First, the accusative-marker “o” assigned to the embedded subject has shown to function not only as a case-particle, but also as a discourse-marker. The hypothesis is that the relevant discourse effect is the speaker’s emotion of unexpectedness, which comes from his/her prejudice. Bearing this in mind, the researcher noted that in case “o” is omitted, the unexpectedness in the reason-asking question with “nani-o” are neutralized or loosened. The conclusion is that “ga” and “o” are quite similar with respect to the discourse effects of unexpectedness, but are distinguished in the following two grounds: in the former, the unexpectedness is based on new information, whereas in the latter, it is based on old information.

研究分野：理論言語学

キーワード：国語学 理論言語学 はだしの主題

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の契機は、名詞句が「は」を伴う主題文、国語学者の三上が着眼したはだしの主題文、英語をはじめとする諸言語の主題文を生成文法理論の立場から比較・考察することであった。日本語において主題とされる名詞句は、伝統的に「は」によって表現されるものを指すとされてきたのに対し、「はだしの主題」には「は」が付かないという点に、何らかの文法上・意味上、そして情報構造上の相違点があるのではないかという問いを立てた。具体的には、[例文]に対する以下の6つの[問い]である。

[例文]

・「は」主題文

その本は太郎が書いた

・はだしの主題文

その本、太郎が書いた(の?)

・英語における主題文

That book, Taro wrote.

[問い]

「はだしの主題」と、単に格助詞や副助詞の省略された構文とでは、文法的にどのような違いがあるのか。

名詞句+「は」による主題、はだしの主題、英語をはじめとする諸言語の主題、それぞれの類似点と相違点にはどのようなものがあるのか。

「はだしの主題」が、名詞句を際立たせる機能を持つ他の構文や文法的操作とどのように関連するのか。

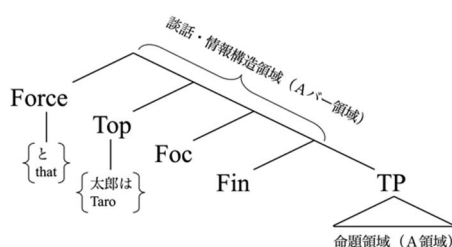
他言語との比較・対照による、主題化の一般的な性質とはどのようなものなのか。

それぞれの主題が、どのような文法構造、意味的役割を持つのか。

埋込節における「と」や *that* と、主題化とはどのような関係を持つのか。

研究を遂行する際の理論的枠組として生成文法理論を採った。特に、生成文法理論から派生し、文の語用的側面、情報構造、談話効果といった、文法外的要因を追究するカートグラフィー理論を軸に分析を行った。文の命題の意味を補完する要因に対して、Rizzi は Force (発話力) を想定し、それらが Top (主題)、Foc (焦点)、Fin (定形・不定形) といった機能範疇の階層構造によって示されるとした。本研究では、「と」や *that* を伴う主題文とはだしの主題文の違いが、これらの機能範疇の階層構造によって説明できる可能性を模索した(下図参照)。

[図]



2. 研究の目的

本研究の最終的な到達目標は、さまざまな言語における主題化の性質を明らかにすることで、文法レベルや談話レベルで特定の名詞句を際立たせるメカニズムに関する一般化を行い、Rizzi が提唱する談話的階層構造の精緻化を図ることであった。特に、英語における主題文、日本語における「は」表示された主題文とはだしの主題文に焦点を当て、それらの振る舞いをカートグラフィー理論によって定式化することを試みた。この研究成果を基に、主題表現の一般的及び固有的な性質を理解することが可能となり、最終的には日本語教育や英語教育をはじめとする外国語教育の効率化に寄与することにつながると考えた。

3. 研究の方法

コロナウイルス感染拡大の影響で、研究活動は専らオンラインによる学会発表及び聴講、論文の執筆及び文献研究となった。本研究の遂行に当たって辿った方法は以下の通りである。

(1) 理論的背景の把握

まずはカートグラフィー理論が提唱された 1990 年代後半の文献を研究し、生成文法理論が理論的な変革を遂げた背景を調査した。形式的・命題的意味のみを対照とするチョムスキーの理論を補完し、言語の運用的側面を、主に A バー領域に注目して理論化したものである点を理解した。重要な概念として、解釈・意味の二重性 (Duality of Interpretation/Semantics)、基準 (-criterion)、基準凍結 (Categorial Freezing)、そして 1980 年代に採用されていた主要部・指定部一致 (Spec-head Agreement) について把握した。

(2) 言語横断的研究

カートグラフィー理論はヨーロッパの学派によって提唱されたものであることから、イタリア語やフランス語等の統語現象に係る文献を中心に研究した。並行して遠藤をはじめとする、カートグラフィー理論に基づく日本語研究のフォローも行った。2020 年に遠藤・前田によるカートグラフィー理論の概論書が刊行されるに当たり、同書籍をゼミのテキストに選定して学生と共に議論した。

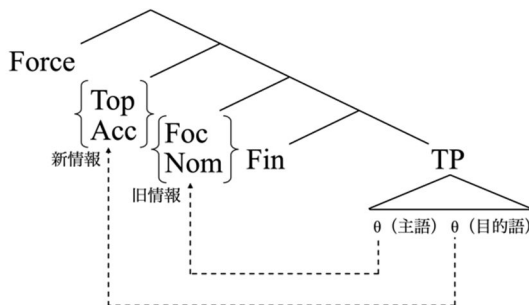
(3) 仮説及びデータ収集と経験的実証

申請者が長年研究してきた例外的格標示 (Exceptional Case-marking) 構文を再考した。日本語の例外的格標示構文に関しては、その補文における対格主語が、主文現象であるはだしの主題化に対応するものである、という仮説の経験的実証を試みた。はだしの主題がカートグラフィー上トピックの階層を占めるのであれば、例外的格標示構文の補文対格主語も旧情報を表すはずである、という仮説を立て、それを裏付けるデータを収集した。この仮説は概ね正しいことが実証された。

(4) 帰結と含意

はだしの主題に当たる名詞句が例外的格標示構文における対格主語であるという仮説が実証されたことから、対格の格助詞「を」そのものにも情報構造上の特質があると考えた。つまり、主題を表す名詞句が「を」で表示されるということは、「を」が旧情報を表す性質を内在的に持っていると予測した。格助詞残留省略構文における意外性 (unexpectedness) の表出に着目し、「を」が旧情報に関する意外性を表すこと、そして「が」が新情報に基づく意外性を表すことが判明した。単なる格助詞としての機能だけでなく、情報構造上も「を」と「が」が好対照を成すことが裏付けられた (下図参照)。

[図]



4. 研究成果

本研究を通して刊行された主な論文及び口頭での研究発表は以下の通りである。

においては、名詞句の格標示と語順に関する制約を明らかにすることができた。これは後に、カートグラフィー理論内で A 移動がどのように扱われるかについて議論した へと継承された。

は格認可のシステムと派生の形式について、チョムスキー理論とカートグラフィー理論を比較しながら考察した論文で、特に後者に基づく例外的格標示の分析は、への布石となるものとなった。この結果、においては、カートグラフィー理論の見地から *that* 痕跡効果に関する新しい分析を提案することにつながった。これらと並行して、格をはじめとする文法機能の認可形態、及びそれを司る機能範疇の発達などを において論じた。この論文は指導学生との共著として刊行できた点も大きな功績だと言える。は一連の研究から生じた疑問をカートグラフィー理論の見地から説明しようと試みた論文で、形式的な文法のレベルを超えた情動が、格標示とどのように関連するかを追究したものである。に関しては、学生の卒論指導の際に注目した新しいデータを扱った発表で、特にでの提案をベースにした分析が日本言語学会によって評価されたものと考えられる。

今後の課題は以下の通りである。意外性の情動と格標示の関係を定式化し、国際学会の Japanese/Korean Linguistics Conference (2024) に概要を提出したが、残念ながら採択されなかった。概要の語数制限のため実証的なデータや分析を含めることができなかった点が反省点である。本研究の成果を更に簡素化、洗練化することで、理論的側面と実証的側面とをバランス良く提示することが今後の課題である。

[論文]

・ 2019 年

Taguchi Shigeki. (2019). Condition on Cyclic Linearization. 『信州大学総合人間科学研究』(13), (pp. 75-87).
(https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/record/20930/files/Arts_and_Science13_07.pdf)

・ 2022 年

田口 茂樹. (2022). 「補文主語の標示：カートグラフィー理論に基づく日・英語の比較」.
『京都ノートルダム女子大学言語文化研究』(10), (pp. 5-24).
英文タイトル: On the Marking of Embedded Subjects: A Comparative Study between Japanese and English based on the Cartography Theory
(https://notredame.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=611&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

・ 2023 年

田口 茂樹. (2023). 「A 位置における基準凍結：カートグラフィー理論からの試案」.
『京都ノートルダム女子大学研究紀要』(53), (pp. 39-51).
英文タイトル: Criterial Freezing in A-Positions: A Tentative Attempt from the Cartography Theoretical Perspective
(https://notredame.repo.nii.ac.jp/record/635/files/研究紀要第53号_04_学術論文_田口茂樹.pdf)

田口 茂樹・迫間 文華. (2023). 「言語接触による機能範疇の統語的变化：隔離児の英語とピジン英語の比較」『京都ノートルダム女子大学言語文化研究』(11), (pp. 5-22).
英文タイトル: Syntactic Changes in Functional Categories through Language Contact : A Comparative Study between an Isolated Child's English and Pidgin English
(https://notredame.repo.nii.ac.jp/record/646/files/言語文化研究第11号_01_田口・迫間.pdf)

・ 2024 年

田口 茂樹. (2024). 「格標示詞の残留と談話効果：情動抑制句の削除による統語的派生」.
『京都ノートルダム女子大学研究紀要』(53), (pp. 39-51).
英文タイトル: Case-marker Stranding and Its Discourse Effects: Syntactic Derivations Through the Deletion of Emotion-Suppression Phrase

[口頭発表]

田口 茂樹・黒田 悠華. (2022). 「日本語のガ・ノ交替における「ノ」の残留について」.
日本言語学会第 165 大会 (オンライン).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田口茂樹	4. 巻 53
2. 論文標題 A位置における基準凍結 カートグラフィー理論からの試案	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田口茂樹・迫間文華	4. 巻 11
2. 論文標題 言語接触による機能範疇の統語的变化: 隔離児の英語とビジン英語の比較	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田口茂樹	4. 巻 10
2. 論文標題 補文主語の標示: カートグラフィー理論に基づく日・英語の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hideki MAKI, Yao XING, Megumi HASEBE, Shigeki TAGUCHI, Satoshi OKU, Yukiko UEDA, Masao OCHI, Kosuke NAGASUE, Michael SEVIER	4. 巻 47
2. 論文標題 The Minimal English Test (MET) 60: Its Correlation with the English Section of the National Center Test for University Admissions 2019	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学地域科学部研究報告	6. 最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shigeki Taguchi	4. 巻 10
2. 論文標題 Condition on Cyclic Linearization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学総合人間科学研究	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Maki, Hideki, Wen-Liang Wu, Xiao-Yu Jin, Xiang-Lin Li, Megumi Hasebe, Shigeki Taguchi, Satoshi Oku, Yukiko Ueda, Masao Ochi, Kosuke Nagasue, and Michael Sevier	4. 巻 44
2. 論文標題 The Minimal English Test: Its Correlation with the English Section of the National Center Test for University Admissions 2018	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin of the Faculty of Regional Studies, Gifu University	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田口茂樹・黒田悠華
2. 発表標題 日本語のガ・ノ交替における「ノ」の残留について
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------